

国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する

調査研究完了報告書

【HP 公開用】

1. 調査研究課題

1. 1. 「探究基礎」に関する研究開発

1. 1. 1. Knowledge Question に基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

TOK の趣旨を踏まえて、「探究基礎 I (HOP)」において「問い」に対する Knowledge Question を考えさせることで、多角的な視点から探究活動を捉える力を涵養するための指導法を開発する。

1. 1. 2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

EE における個人研究エッセイに対する評価法の調査研究を行い、「探究基礎 II (JUMP)」における論文評価に、普遍的な論文作成能力の評価を可能とするためのルーブリック評価を導入する。

1. 2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対する CAS を踏まえた評価法の研究開発

CAS における様々な体験的な活動に対する評価法の調査研究を行い、教科外での生徒主体の活動に対する評価を可能とするためのルーブリック評価とポートフォリオ評価を導入する。

2. 調査研究概要

本調査研究は、「探究基礎」と「実体験を重視した活動」においてすすめられた計画である。

以下にそれぞれの調査研究の概要を記す。

2. 1. 「探究基礎」に関する研究開発

京都市立堀川高等学校は、普通科ならびに、平成 11 年度より専門学科「人間探究科」及び「自然探究科」を設置している。これらの専門学科（以下、探究学科群）はそれぞれ、人文系統の学習を深め人間の文化や社会・行動について探究する能力と態度を養うこと、理数系統の学習を深め自然の現象や原理・法則について探究する能力と態度を養うことを目的としている。

また、同校では「探究基礎」という授業が実施されている。この授業は、探究学科群の専門科目として平成 11 年度に開設されたが、現在では「総合的な学習の時間」と教科「情報」を有機的に接続させて実施されている。この授業では、探究する能力と態度を養うための手段として、生徒に課題研究を進めさせている。一般的に研究という行為は、専門的な課題を探究し、新知見を得ることを目的としているが、

同校における課題研究は、その研究過程での経験を通じて、生徒がわが国の科学・文化の新たな担い手となるために必要な普遍的な探究能力を身につけることを目的としている。実際に課題研究をすすめるためには、既存の答えがない問題に対して、論理的に考え、客観的な根拠を集め、答えに近づいていこうとする能力と態度が必要となる。そのため、1年次前期の「探究基礎Ⅰ(HOP)」(以下「HOP」と呼ぶ)、1年次後期の「探究基礎Ⅰ(STEP)」(以下「STEP」と呼ぶ)、2年次の「探究基礎Ⅱ(JUMP)」(以下「JUMP」と呼ぶ)の3段階に区切った段階的指導を行っており、JUMPでの課題研究に向けた基礎的な力をHOP、STEPで養っている。どの段階においても、「問いを具体化する」「根拠を収集する」「自己の考えを言語化して他者に伝える」などの実践を繰り返すことで技術の向上を図るとともに、「言語化することで自己の理解を深化できる」「他者との対話や相互評価などを通じて自己の考えを再構築することができる」という高次の気づきを与えることで、課題設定能力と課題解決能力を伸長させている。また、HOP、JUMPでは具体化された問いについて根拠を伴う論理的な答えを導いた後、その過程を他者に伝えるために言語化する取り組みを設けている。言語化は論文やポスター発表などの形式に則って進め、情報の発信および受信が論理の枠組みの共有により適切に行われることを学ぶよう促している。

SSH研究指定により「探究基礎」のうち、問いの具体化や根拠の収集手法および発表指導についての研究開発を進めてきた。第1期指定(平成14年度～16年度)では根拠の収集手法のうち特に実験・実習プログラムの開発を行った。第2期指定(平成17年度～21年度)では研究課題の設定に対する指導法の開発および発表指導法の開発を行った。その結果、生徒の課題解決能力を伸長する実験・実習プログラムを開発し、また解決可能な研究課題を設定するためには、質問が有効であることが分かった。さらに生徒の研究過程における発表において、他者から質問を受けることにより生徒自身が根拠の不足や研究課題の具体化の必要性を自覚するという効果があることが分かった。現在は第3期指定(平成22年度～26年度)として、論理的・批判的言語能力育成のための指導法および探究活動指導法の共有方法についての研究を進めている。また、特別枠研究、中核的拠点育成プログラム研究、コアSSH研究開発を行い、小・中学校への指導法等を普及させた。

2. 1. 1. Knowledge Questionに基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

様々な人間が国境や地域を超えて行き交うグローバルな社会では、そこで活動する人々の抱える社会的・文化的文脈も多種多様なものとなる。こういったグローバルな社会において、他者と協働し課題解決に取り組むためには、背景にある社会的・文化的文脈が異なれば「解決すべき課題」もまた異なるということを自覚する必要がある。

HOPは、探究の具体的方法を学ぶ前に、どの分野を探究するうえでも必要な探究の進め方や表現の仕方を学ぶことを目的としている期間である。教授する内容は、探究活動の進め方、成果を論文にまとめることの意義、クリティカルシンキングや論理的推論の方法、課題が満たすべき要件、論文の形式・書き方、情報収集の方法

などであり、講義やグループワーク、そして実習を行う。従来の HOP では「問い」を「課題」へと具体化することを重視していたため、「問い」そのものに対する抽象的考察は行われておらず、より広い視野と多角的な観点を備えて課題解決に取り組むことのできる人材を育成するものには至っていなかった。

そこで HOP において「問い」に対する Knowledge Question を問いかけるような取組を行うことで、多角的な視点から探究活動を捉える力を涵養し、普遍的な探究能力を持つ人材を育成することを目的とした授業の研究開発と実践を行った。また、授業後に生徒が学習成果の振り返りを書いた「振り返りシート」の記述を分析し、教育効果の評価を行い、今後の実施方法や運用方法に関する課題を見出した。

2. 1. 2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

JUMP は、学問領域ごとに開設されるゼミにて実際に探究活動を行う期間で、普遍的な探究能力を実践的に知ることを目的としている。最終目標である論文作成に向け、生徒それぞれが探究活動計画を作成し、それをゼミ内の中間発表会で交流する。その後、教員・TA¹の指導のもと、実験・調査活動を行う。ゼミ内でポスターなどを用いて発表会を行い、教員・TA よりアドバイスや批判を受けそれを反映する。その後、ポスター発表会で再度教員や外部の見学者からアドバイスや批判を受ける。それらの内容をふまえて論文の手直しを行い、最終提出をする。

また、これらに加え本校では総合的・普遍的な探究能力を身につけられるよう、生徒がそれぞれ学んだ手法や考え方を、その分野を超えて共有し互いに学び合っている。生徒は様々な分野に分かれ研究を進めているが、研究の中間報告として一斉にポスター発表をする発表会を実施するとともに、探究活動を振り返った活動録を作成し、生徒間で互いの研究過程やそこでの経験を共有している。

JUMP の成績評価は「総合的な学習の時間」の評価として行われている。「興味・関心を持つ力」、「課題を設定する力」、「課題を解決する力」、「他者に表現する力」の 4 つの観点に基づき、通常のゼミ活動やポスター発表、論文などの様々な取組の成果を材料として各ゼミの担当者が評価していた。その中の論文の評価は、各ゼミの担当者が「論文チェックリスト」という指標と各ゼミ独自の評価の指標を基に行っていた。

このように従来の論文だけを対象とした評価は、成績評価の材料にはなるものの、全ゼミ共通の評価規準がなく、学問領域を横断して普遍的な論文作成能力を評価できなかった。また、基準や目指すべき到達点が不明瞭であり、生徒に評価を還元し、より高いレベルの論文を目指すための指針となるようなものではなかった。

そこで、この論文の評価法に EE の個人研究エッセイに対する評価法を取り入れ、全ゼミ共通の論文ルーブリックを研究開発し、評価を実践した。その後、ゼミ担当教員を対象に、ルーブリックの使用感に関するアンケート調査を行い、今回のルーブリック評価の有効性を評価し、運用方法に関する課題を見出した。

¹ 各ゼミでは大学院生がティーチングアシスタントとして指導補助にあたっている。

2. 2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対する CAS を踏まえた評価法の研究開発

同校では、教科外での実体験を重視した多種多様な活動の機会を生徒に提供している。具体的には、海外研修委員会や探究基礎委員会、コミュニケーションレジン講演会運営活動や学校説明会スタッフ活動などである（以下、これらの活動を体験活動と呼ぶ）。体験活動では、生徒は自主的に活動に参加し、組織の確立や取組の目標設定、企画運営、事後総括などを自ら行っている。教員の指導は、生徒に活動の意義や課された役割の重要性を理解させること、目標の実現に向けた企画立案力および運営力を育成すること、失敗や成功の実体験に対する自己評価および相互評価を通じて新たな取組に対する意欲を向上させること、などに重点が置かれる。これらの体験活動は同校の特徴的な教育活動として学年や年度を越えて継続的に実施されており、生徒の成長の機会となっている。しかし、指導の観点の不明瞭さゆえに、その方法に各教員の技量や経験に応じて差異があることや、過年度の取組に対する評価や反省が十分に引き継がれていないことなどの課題が存在している。また、生徒による活動後の反省会などでは、仲間や教員への感謝やねぎらいが多く、取組を通じた成長につながるような具体的な自己評価につながっていないという、評価方法に関する課題も存在している。このように生徒の3年間の段階的成長を踏まえた系統的教育活動とするためには、さらなる改善が必要である。諸活動のねらいやめざす生徒像を明確にし、活動の到達目標を具体的に設定することが求められる。

そこで、CASにおける評価法を参考として、生徒自身の成長や自己評価に有効な、評価規準や評価方法、ならびに評価対象の蓄積方法を研究し、体験活動のルーブリック評価とポートフォリオ評価を開発し実際に運用した。また、生徒の振り返りシートとポートフォリオに関するアンケートによって、今回運用した評価方法に関する評価を行い、今後の運用に関する課題を見出した。

3. 調査研究の目的と仮説

3. 1. 「探究基礎」に関する研究開発

3. 1. 1. Knowledge Question に基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

「探究基礎」における問いに対する Knowledge Question を考える機会を設けることで、多角的な視点から探究活動を捉える力を涵養し、普遍的な探究能力を持つ人材を育成することができるという仮説を掲げ、TOK の趣旨や実践事例について調査研究を行い、より発展的な「探究基礎」の指導法を開発する。

このような指導法が構築されれば、以下のことが期待できる。

- ①「問い」に対する Knowledge Question を考えさせることで、社会的・文化的文脈が異なれば、「解決すべき課題」もまた異なることを理解させ、より

多角的な視点から探究活動を捉える力を涵養し、普遍的な探究能力を育成できる。

②個別具体的で様々な社会的・文化的文脈を仮想・設定し、その文脈の中で「問い」を社会的・文化的意義のある「解決すべき課題」へと導くシミュレーションをさせることで、グローバルな社会における多様性を理解し、他者と協働し課題解決に取り組む態度を涵養できる。

3. 1. 2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

EE の評価法を取り入れることで、「探究基礎」における論文に対する評価法をより改善することができるという仮説を掲げ、TOK の実践事例について調査研究を行い、「探究基礎」の評価法を開発する。

このような指導法が構築されれば、以下のことが期待できる。

①論文の評価に、ルーブリックを導入し、評価の観点を細分化して観点ごとの到達度を文言で明示する『マトリックス表記』を生徒に提示することによって、学際的な観点から自分自身の学びや探究活動を評価し、到達度を省みて次のステップを自発的に目指す能力を育成できる。

②各学問領域を超えて、横断的、統括的な評価規準/基準を設定することで、普遍的な論文作成能力を評価することができ、かつ、あらかじめ達成すべき目標を生徒に明示することで、活動の指針を明確化できる。

3. 2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対する CAS を踏まえた評価法の研究開発

「実体験を重視した活動」に対する評価規準を整備することで、これらの活動をより系統的かつ組織的な教育活動として再構築できるという仮説を掲げ、CAS における評価法の調査研究を行い、同校における「実体験を重視した活動」に対する評価法を開発する。

このような評価法のモデルが構築されれば、以下のことが期待できる。

①すべての体験活動を 1 つの評価方法で評価することにより、活動が相互に有機的に関連し、堀川高校の最高目標である「自立する 18 歳」につながっていることを可視化できる。

②活動により達成すべき目標を、事前に生徒に明示する。かつ、評価の観点を、成長の段階を示した文章で明記する「マトリックス表記」を採用することで、生徒に目標とすべきことを常に明確に提示することができる。

③活動の成果物を評価と共に蓄積することで、生徒の成長を長期的な視野で捉えることができる。また、3 年間の体験活動を通した生徒の成長を可視化することで、その成長に対する自覚を促し、かつ必要に応じて言語化することができる。

4. 調査研究の内容

4. 1. 調査研究の対象とする国際バカロレアのカリキュラム

4. 1. 1. 「探究基礎」に関する研究開発

4. 1. 1. 1. Knowledge Question に基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

本校の HOP に TOK の趣旨を取り入れるために、IB 校での TOK の実践事例やテキストをもとに、TOK における Knowledge Question を対象として調査研究を行った。

4. 1. 1. 2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

本校の JUMP における論文に対する評価に EE の課題エッセイに対する評価方法を取り入れるために、IB 校での EE の実践事例を対象として調査研究を行った。

4. 1. 2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対する CAS を踏まえた評価法の研究開発

本校の体験活動の評価に CAS の活動に対する評価方法を取り入れるために、IB 校での CAS の実践事例や評価方法を対象として調査研究を行った。

4. 2. 具体的な調査研究内容

4. 2. 1. 「探究基礎」に関する研究開発

4. 2. 1. 1. Knowledge Question に基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

平成 24 年度は、TOK の概念や、Knowledge Question を考える際の指導事例を他校訪問や文献をもとに調査し、TOK における生徒の持っている知識を引き出す指導法や、科学や倫理といった知識領域を批判的に捉えなおすための指導法を研究した。TOK では生徒に新たな知識を与えることはせず、生徒の持っている知識を引き出し、Knowledge Question を考えさせ、科学や倫理、文化、思想、言語、芸術、感性などそのものを批判的に捉えさせる。この際、抽象的な考察が展開することを免れず、生徒にとってはかなり困難な議論となる。しかし、理性的な考え方、感性的な考え方、反証の仕方など様々な思考法を教員、生徒同士で提示しあい、既得の知識を結び付けるよう指導することで、国際的舞台で他者を理解するために必要不可欠な批判的、多面的なものの見方が身に付くということがわかった。

平成 25 年度は本校における HOP の授業を詳細に観察、記録し、「問い」に対する Knowledge Question を考える機会を HOP のどこでどのように取り入れるのかを検討し、平成 26 年度の指導案を研究開発した。

平成 26 年度は作成した指導案を HOP において実施した。

HOP では、探究という行為の意味や、既存の知識・情報を入手する方法およびそ

の信憑性，入手した情報の利用・加工の仕方，論理の組み立て方などを，生徒は実践を通じて身につけている。具体的には，ある問いに対して論理的に答えるために必要な根拠を考え，根拠となりうる情報を書籍や WEB から入手する活動を行っている。

このような一連の活動の中で，問いそのものに対する Knowledge Question について考える機会を設け，ある問いを持つことの意味やその問いを解決する価値があるかどうかなどについての議論を促していく。その際，これらの考え方・捉え方には多様性があるということに気づけるように，時代による知識の枠組みの変化や文化による差異などの具体例を挙げて指導する。

具体的には【資料1】のカリキュラム表における「第7回 課題設定論」の単元において，Knowledge Questionに基づく多角的視点の涵養をねらいとした指導を行った。

従来の「第7回 課題設定論」では，課題設定のプロセスにおいて，問いの曖昧な点を具体化し，論点を明確にすることで，解決可能な課題へと磨き上げることを重点的に指導していた。今回，TOKの趣旨を踏まえた授業として，問いに対するKnowledge Questionを考えることで，問いそのものを問い直すような内容と，抱える立場が異なれば解決すべき課題も異なることを自覚するよう促すような内容を加えて授業を展開した。実践した授業の指導案とワークシートは別添の資料を参照されたい。【資料2】【資料3】【資料4】

4. 2. 1. 2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

平成 24 年度は TOK の課題エッセイやプレゼンテーションの評価規準を他校訪問によって調査研究した。

平成 25 年度は JUMP の評価法を改善するための調査研究対象を TOK から EE へと変更した。というのは，JUMP では生徒自らが課題を設定し，答えに近づくことを重視しているが，TOK では，与えられた課題について，多面的に捉えることを重視しており，このような観点が異なったためである。そこで，生徒自らが課題を設定し，解決に向けて根拠を調べ，エッセイにまとめるという，同校の JUMP の活動により近いと考えられる EE の評価法に注目した。重視すべき評価の観点は，情報発信者が自己の伝えるべき情報や知識等を他者に正しく伝達できたか，根拠を伴う言語情報が受信者に適切に伝えられたか，さらに，伝達された情報や知識が発信者の意図に即して受信されたか，などが挙げられた。そして，平成 26 年度に運用する論文ループリックの研究開発を行った。

平成 26 年度は，平成 25 年度に作成した論文ループリックを用いて JUMP における論文の評価を実施した。

JUMP では，自らの問いに答えるために文献調査・社会調査・実験観察などを行うことで，必要な根拠を入手している。研究の進捗状況や成果を発表する機会を設けており，研究内容について議論することを通じて，言語化するという行為が自分自身の理解を深め自己の取組を客観的に評価できる能力につながることを学んでいる。この言語化された文章，つまり論文の評価に，EE の評価法を取り入れ開発した

論文ループリックを用いた。

論文ループリックでは、論文を構成する要素を「探究課題」「調査・研究方法」「学問領域に関する知識・理解」「考察・分析」「結論」の5つに分解し、その5つを評価の観点とした。そして、その7つの観点について3段階の到達度を設けて、それぞれの段階において予想される生徒の論文の特徴を文言で示した。【資料5】

4月のJUMP開始当初に生徒に配布する「探究ノート」という個人研究ノートに論文ループリックを印刷しておくことで提示し、論文執筆の過程において、生徒自らが到達段階を自己評価し、作業の指針とできるようにした。

また、ゼミ担当者に論文ループリックに関する説明資料を配布し、運用方法やループリック評価の意義を共有した。【資料6】

ループリックを用いた他者評価は2度行った。まず8月の1次提出論文に対して、TAによるループリック評価を行った。ループリック評価は生徒にフィードバックし、生徒は評価を受けて次のステップをめざして論文修正に取り組んだ。その後、9月の2次提出論文に対してゼミ担当教員によるループリック評価を行った。そしてループリック評価を生徒にフィードバックし、論文の最終提出に向けた具体的な修正指針を提示した。なお、今回のループリック評価は成績評価との関係は考慮に入れていないため、最終提出された論文の評価は行っていない。

4.2.2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対するCASを踏まえた評価法の研究開発

平成24年度は、調査研究の第1段階として、他校の実践事例や評価の具体的設定規準の調査・研究の研究を行った。同時に、本校の「実体験を重視した活動に関する研究」に関して、過去に行われてきた体験活動の取り組みや総括を整理した。これにより、体験活動のこれまでの状況を総合的に把握し、調査研究の基礎を固めることができた。

平成25年度は、「実体験を重視した活動」に関する評価規準の整理・設定をめざし、国際バカロレアのCAS活動の概要についてIB認定校への訪問や文献により研究を行った。そこでは、IB認定校における学習者を中心に据えた学びの在り方、体系的かつ分析的な評価と指導法から、体験活動について多くのヒントを得た。まずCASにおける評価の手法の中から、生徒に評価規準/基準を用いて自己評価を促す方法、及び生徒個々の活動を蓄積していく方法に知見を得た。また、具体的な評価規準/基準の作成や提示方法に関しては、数値として評価できない分野を総合的に評価しようとするパフォーマンス評価に着目し、専門家にアドバイスを求めつつ開発・研究を行った。その結果をもとに、①評価規準/基準の表記、②評価の実施方法、③評価の蓄積方法について、検討を進めた。そして、体験活動ループリックとポートフォリオ評価の運用方法を開発した。

平成26年度には、平成25年度に開発した体験活動の評価を以下のような流れで実施した。

時 期	試 行 内 容	資 料
3 月下旬 ・第 2 回合格者登校日 ・探究紹介	・担任へ「ポートフォリオ」「ループリック」の意義/ 方法の説明 ・合格者に「ポートフォリオ」と「ループリック」によ る評価の概要/意義を伝える。	【資料 7】
4 月上旬 ・第 3 回合格者登校日 ・LHR ・宿泊研修スタッフ会 議	・生徒へポートフォリオ用ファイルを配布 →宿泊研修ボランティアスタッフ会議で作成試行, 説明 ・作成の概要/意義を確認し, 具体的な方法を提示す る。 ・その日の活動からファイリングを開始させる。	
4 月中旬 ・宿泊研修反省会 ・L H R	・「16 期生スタッフ・委員会活動振り返りシート」を用 いた自己評価, 他者評価を実施 ・上記シートをポートフォリオにファイリングさせる。 ・担任から全生徒へ「ポートフォリオ」の説明, 作成促 進 ・生徒は, 各種体験活動の資料をポートフォリオにファ イル開始	
6 月中旬 ・LHR 等	・ポートフォリオ作成経験のある教育実習生からその手 法や意義を生徒が学ぶ機会を設ける。実際に作成され たものを見せる。	
7 月上旬～ ・担任団と打ち合わせ	・ポートフォリオ活用の今後の見通しを共有する ループリック提示の原案を提出する	【資料 8】
学校説明会 ・説明会リーダー会議 ・説明会スタッフ会議	・会議において, 事後の振り返りのあることを予告。 スタッフ活動における自己の目標を持つよう意識づ け	
7 月下旬 ・説明会スタッフ反省 会	・「スタッフ活動振り返りシート」を配布, 記入させ, 提出	【資料 9】
・夏休み前アセンブリ	・生徒の各種体験活動が多様化する夏休み前に, 再度, ポートフォリオ作成の意義を解説, 作成促進	
10 月下旬～ 学校説明会 ・説明会リーダー会議 ・説明会スタッフ会議	・「体験活動における自己評価指標・自己評価シート」 配布 使用方法を説明の上, 生徒に目標を設定させる	【資料 10】
11 月中旬 ・説明会スタッフ反省 会	・「体験活動ループリックによる他者評価用紙」を 2 枚 ずつ配布 ループリックの指標に基づいた他者評価を生徒相互 で実施 同時に「自己評価シート」を用いて自己の振り返り	【資料 11】

	を行う	
12月上旬	・担任からポートフォリオの整理を呼びかけ	
12月下旬 ・学年アセンブリ	<p>■第1回ポートフォリオ整理と「ループリック」による自己評価</p> <p>・ポートフォリオを用い，9か月間の体験活動の振り返りを行う。</p> <p>「体験活動における自己評価指標・自己評価シート」配布</p> <p>冬休みを利用し，ポートフォリオを用いて9か月間の振り返りを行うよう指示。もっとも印象に残った体験活動について記入させる。冬休み明けに提出。</p> <p>・用紙裏面に，ポートフォリオ作成に関する現時点でのアンケート実施</p>	【資料13】
3月下旬(予定) ・学年アセンブリ ・LHR等	■第2回ポートフォリオ整理と「ループリック」による自己評価	

5. 調査研究の成果

5.1. 「探究基礎」に関する研究開発

5.1.1. Knowledge Questionに基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

5.1.1.1. HOP 第7回の振り返りシート

探究基礎I HOPでは，毎回の授業の終わりに「振り返りシート」によって，生徒に学びの省察を促している。「第7回 課題設定論」の締めくくりには「課題設定において，多面的な視点から問いを捉えることは，今後どのような場面に生きてくると思いますか。」と問いかけ，生徒に学んだことを省察するよう促した。【資料12】

以下，「第7回 課題設定論」での生徒の振り返りから特徴的なものを抜粋し，そこから読み取れる学んだ内容を5つに類別した。

資料評価

- ・偏った情報を集めてしまうことを防ぐことができます。
- ・情報をうのみにせず真実を考えることができる。

他者理解

- ・ニュースを見ていて、なぜその人がそんな意見を持っているのかなどを考えて、自分の考えを深めることができる。
- ・寛容に他人の意見をうけとめ、それをクリティカルシンキングしながら自分の中に取り入れることが大切だと思いました。

批判的思考

- ・思い込みや先入観で、物事を判断しないようになれると思う。
- ・固定概念にとらわれず、課題を決める場面。
- ・1人でディスカッションができる。
- ・自分の意見を主張するとき、一度別の視点に立つことで、自分の意見の弱い部分がはっきりして、より説得力のある主張ができると思う。
- ・物事の本質が見やすくなる。
- ・論文作成のときに、主観的な主張に走ることを阻止できる。

創造的思考

- ・何かアイデアを発案しなければならないとき。
- ・クラスで活動する内容をきめるとき、その内容がだれに・どのように・・・・なのかを考えることなど、人の気持ちにたって考えるときに必要であると思う。
- ・偏った見方を避け、個別だと思っていたことが多面的な視点に立つことによってつながるかもしれない。
- ・新しい発想をするとき。デザイン・設計
- ・客観視する能力がつき、計画をたてるときや企画の提案の際に役立つ。
- ・話し合いのときなど、他の意見から少し見方を変えた意見が出せると思う。

熟慮と決断

- ・進路選択や、将来大きな買い物をするときなどによい選択をするのに役立つかなと思います。
- ・リスクへの柔軟な対応・リスク軽減。
- ・ショックな出来事が起こったけど、ポジティブにとらえなければならないとき。
- ・数学などで解答をつくっていくときに、これがダメならこの解法にすべきだとすぐに考えることができるというところに活きると思います。
- ・生活していくうえで、保険やローンなどを選択するときや病院選びなど、比較して選ぶとき。

5. 1. 1. 2. 評価

振り返りシートの記述より、生徒は問いを多角的に捉えることで、異なる立場を想定したうえで論を展開することにつながるという自覚を得たと考えられる。このような成果より、今回の実践はグローバルな社会において異なる立場や文化を背景とする他者と共に協働して課題解決に取り組む態度を涵養することに有効であると考えられる。

5. 1. 2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

5. 1. 2. 1. ゼミ担当教員に対するアンケート

JUMP では、毎年の期間の終了後に各ゼミ担当教員にアンケートを実施している。本年度はそのアンケートにループリックを用いた論文評価に関する質問項目を設定し、実際にそれぞれのゼミで論文評価と指導を行うにあたって、ループリックの使用感がどのようなであったかを調査した。結果を以下の表にまとめる。

質問 1:ループリックの各観点はどうでしたか？					
十分にわかりやすかった	まずまずわかりやすかった	わかりにくかった	全くわからなかった	無回答	
1	13	2	0	0	n=16
6.25	81.25	12.5	0	0	[%]

(表 1)質問 1 への回答

質問 2:ループリックを用いた論文の評価はしやすかったですか？					
十分に評価しやすかった	評価しやすかった	評価しにくかった	かなり評価しにくかった	無回答	
1	13	2	0	0	n=16
6.25	81.25	12.5	0	0	[%]

(表 2)質問 2 への回答

質問 3:評価時点での到達度を、生徒に具体的かつ客観的に認識させるために役立ちましたか？					
十分に役立った	それなりに役立った	あまり役立たなかった	役立たなかった	無回答	
1	13	2	0	0	n=16
6.25	81.25	12.5	0	0	[%]

(表 3)質問 3 への回答

質問 4:論文修正の指標を、生徒に観点別に認識させるためには役立ちましたか？					
十分に役立った	それなりに役立った	あまり役立たなかった	役立たなかった	無回答	
1	13	2	0	0	n=16
6.25	81.25	12.5	0	0	[%]

(表 4)質問 4 への回答

問 5 :「ルーブリックの内容や運用方法について、ご意見ご指摘などがあればご記入ください。」に対する回答

良かった点

- ・生徒個々に沿った指導ができるので良い取組だと思った。
- ・担任としての立場で言うと、生徒は評価を結構見ていた様子が見られる。

改善すべき点

- ・3段階評価はやりやすいが、生徒の差を表現しきれない。
- ・伸び幅がどれくらいを理想とするのか、その各段階はどのようなものなのか、見極めるのが難しかった。
- ・段階にもう少し幅があると良かった。
- ・文言の検討が必要だと思う。
- ・ルーブリックを生徒が最初に自己評価し、そこからどれだけ伸びたか、自己評価と教員評価できるものがあればよかった。
- ・修正の段階での実施では、生徒は『受理』か『不受理』かに意識がいくので、あまり指標にならない。＊実施時期を検討する必要がある。
- ・この項目だけでは、具体的に何を直せばよいのかわからない生徒が多く見られた

5.1.2.2. 評価

アンケートの質問 3、質問 4 の結果より、ルーブリックを用いた論文評価は生徒に観点と到達度を具体的に提示し、評価を還元することに有効であると共通理解を得られたことがわかる。このような評価の還元は生徒に作業の指針を明確に示すことで、自助的な論文作成能力の養成につながるのではないかと考えられる。

しかし、アンケートの問 5 の回答より、ルーブリック評価の運用方法に関する課題も見られる。「3段階評価はやりやすいが、生徒の差を表現しきれない。」という回答からは、ルーブリックは到達度評価の方法であり、相対的評価には向かないものであるということを共通理解できていなかったことが読み取れる。

また、「ルーブリックを生徒が最初に自己評価し、そこからどれだけ伸びたか、自己評価と教員評価できるものがあればよかった。」「修正の段階での実施では、生徒は『受理』か『不受理』かに意識がいくので、あまり指標にならない。＊実施時期を検討する必要がある。」からは、評価を効果的に行うために、ルーブリック評価の時期や回数について、検討が必要であることが読み取れる。

5.2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対する CAS を踏まえた評価法の

研究開発

5.2.1.7 月学校説明会スタッフ振り返りシート

7 月学校説明会にスタッフとして運営に参加した生徒に対して、振り返りを行わせた【資料 9】。シートは説明会後の反省会にて配布した。説明会準備や学校行事などの日程の関係で、活動の開始前に、具体的な目標設定を行う時間を特にとることはせず、スタッフ会議における告知と呼びかけにとどめた。11 月との比較のため、生徒の振り返りの観点を、ループリックの大項目に分別して示す。

○ 今回の係の仕事を通じて、自分が最も活躍できた・貢献できたと感じた場面（シーン）とその原因

A:自律力

- ・それぞれの仕事の意味を理解して動くことができた。
- ・受付で、ずっと笑顔で来校者の方の対応ができたこと。意識し続けることができた。
- ・本来の自分の仕事でなくても何かできそうなことを見つけて行動することができた。
- ・全体を把握できていたのでリハーサルで別の担当者がいなくて急に任されたときに代役として役割を果たせた。
- ・パートリーダーとして本番直前までフロアの様子を確認したり、他のゼミ長にアドバイスすることができていたこと。

B:計画遂行力

- ・資料詰めの人員配置や時間配分を計画的に考え、実際に予定より早く終えることができた。
- ・入念なシミュレーションの成果が出せた。
- ・3 回目の会場スタッフを担当し、前日までの準備は前もって必要物を手配し、おさえるべき点もおさえられた。
- ・昨年度の経験から、Q&A シートの作り直しやシミュレーションで 2 年リーダーがチェックを行うなど、改善が必要な点を全て新しい方法に変更したこと。

C:コミュニケーション力

- ・前日リハでは、練習を一旦止めてでも連絡や意識を共有する時間の大切さを改めて気づかされた。
- ・指示や説明の後に質問の有無を確認して、フォロワーの理解を毎回確認することで、ミスを軽減し、効率の良い作業ができるようになった。
- ・自分の意見が台本に反映されていたとき。どんな意見でも無駄ではない。
- ・探究基礎の発表の原案を最初の集まりでしっかりと示すことができた。そして 5

人で共有できた。

D:チームワーク醸成力

・暑い中での重労働だったが、昨年自分が説明会に来たときも先輩たちが頑張ってくれたのだろうと思い一生懸命作業できたこと。

E:チーム指揮推進力

- ・受付リーダーチーフとしてパートをまとめることにおいて力を発揮できた。
- ・来校者の案内誘導についてリーダーとして1年生の手助けをすることができた。1年生に対して有効な指示が出せた。
- ・1年と2年が一緒に作り上げる活動紹介で、1年の手本となることができた。

○今回の係の仕事を通して、改善が必要だったと感じた場面

A:自律力

- ・本番の直前まで台本が変わることになり、他のスタッフや先生方に迷惑をかけてしまった。
- ・規則正しい生活ができていなかったため、会議の時にうとうとしてしまった。
- ・スタッフ会議の際に、1年全体で遅れてしまったので、時間厳守を心掛けることが大切で、1人の遅れが全体に影響してしまうことがわかった。
- ・今やるべきことは何かを判断できず、一番重要な発表の練習に割く時間が少なくなってしまった。
- ・あれだけシミュレーションをしたのに突然のトラブルに対応できなかった。
- ・当日は、上手く人が流れていないことにも気づかず、自分の発表に精一杯だったので、他への配慮も必要だった。

B:計画遂行力

- ・説明会全体を通しての動きを理解しきれていなかった。説明会スタッフの仕事をしたことがなかったので、もっと積極的に副代表や先生方に聞きに行くべきだった。計画性のなさが目立った。
- ・優先順位をしっかりと考えられていなかった。
- ・スケジュール管理を徹底しておくべきだった。
- ・シミュレーションでもっと当日の緊張感を感じられるような仕組みを考えないといけない。
- ・アリーナでの練習不足。1回の練習では厳しい。最低でも2回は必要。そしてもっとたくさんの先生方に意見を頂くことが必要だった。

C:コミュニケーション力

- ・多くのコミュニケーションをとり、共有し連携をより強いものにできたならよかった。

- ・リーダーの中で仕事の分担をもっとすべきだった。1人でレジュメ作成，先生との相談をしていた。
- ・説明会に向けて頑張っていこうという雰囲気を作ることができなかった。リーダーとスタッフの間に距離があり，気合の温度差も大きかった。
- ・準備段階で張り紙を付け足した方が良いと思っていたにもかかわらず，先輩リーダーが「今までこれで大丈夫だったから」という意見を信じすぎてしまったこと。
- ・他パートとの結びつきが弱く，当日他パートがどこで何をしているのか知らなかったなので質問に答えられなかった。当日，どこでどのようなパートが活動していて，リーダーは誰なのかが一目見てわかる表を作成するべきだった。

D:チームワーク醸成力

- ・リーダーの頑張りに気づかずに愚痴のような意見を言ってしまうスタッフがいた。

E:チーム指揮推進力

- ・受付スタッフの中でやる気のある人となない人の差を縮められなかった。
- ・スタッフに指示するときに，きっぱりとこうするというのが伝えられず決断力のなさを痛感した。
- ・リーダーという立場なのに受け身になっていた。今思うと自分にできることはもっとあったはず。

○ 今回の係の仕事を通して，伸ばすことができた（伸ばすために努力した）と思う力

A:自律力

- ・責任感
- ・継続力
- ・忍耐力
- ・適応能力
- ・代表という立場がどういうものか，自分の立場をわきまえること
- ・与えられたことだけでなく，他に必要なことはないかという能動的な力
- ・目立たないしんどい仕事でも頑張る力

B:計画遂行力

- ・優先順位をつける力
- ・時間を読む力
- ・たくさん解決すべき点を見つけられるようになった

C:コミュニケーション力

- ・言語化能力，伝える力

- ・コミュニケーション力
- ・みんなを信頼する大切さ

D:チームワーク醸成力

- ・学年の壁を乗り越えて協力する力
- ・朋と楽しむ力

E:チーム指揮推進力

- ・自分たちが教える立場に立った時，教わる立場に戻ることによってその立場を理解しようとする大切さを実感した
- ・大人数を動かす
- ・まとめる力
- ・みんなのやる気を出させる力
- ・後輩を育てるという意識

5.2.2.11 月学校説明会スタッフ振り返りシート

7月に続き，学校説明会にスタッフとして運営に参加した生徒に対して，振り返りを行わせた。11月は活動前に自己評価シート【資料10】を配布し，到達目標を設定するよう呼びかけた。また事後の振り返りがあることも予告した。活動後の反省会で，他者評価用紙【資料11】を2枚ずつ配布し，相互評価を行わせた。

○ 自己評価シートの裏面（自由記述）から抽出

A:自律力

- ・常に周りを見て行動することで，臨機応変に何事も対応できること。
- ・さまざまな事柄に「アンテナ」をはることの難しさを知った。多くの視点から一つのものを見る力がついた。
- ・相手を思いやることがもっとも重要。自分にも相手にも都合があり，基本的に相手を優先すべきである。
- ・堀高生として恥じない行動，それ以上の行動ができたが，少し台本のまますぎ，工夫ができていなかった。
- ・アドリブができるようになったが台詞が早くなってしまう。
- ・質問に対してうまく答えることができたが，困ったときに平常心で発表できなかった。（ポスター発表）
- ・多くの人に堀高の魅力を伝えるという責任感で自分がやるべきことをしっかりとやれた。ただ，小さな気配りが足りなかったし，予測できていなかった。
- ・他メンバーと共にスムーズに活動するために台詞覚えや台本改善に対してたくさんの助言をしてきた。そこは協力的でよかったが，本番ではミスこそしなかったものの，もう少しにこやかにすべきだった。

B:計画遂行力

- ・今の自分の能力の限界を推測できたところ。その限界を伸ばせる方法を考えたい。
- ・前回笑顔が足りないという反省点があったので、今回は快い挨拶を心掛け笑顔を意識することができた。

C:コミュニケーション力

- ・今回の取り組みを通して取り組みで人は変わるのだということを実感させられた。一人では一人になれない。
- ・周りの人に支えてもらう大切さ。人が集まれば集まるほど良いアイデアが出る。
- ・仲間を通し1つのことを様々な障壁と出会いながらもそれを乗り越えるため様々な議論、そして改善をし、成し遂げようとする姿勢を学ぶことができた。
- ・意見を思っているも出せなかった。
- ・全体の中継車のようなリーダーを目標とし、今回の活動ではある程度達成できた。情報を受けてまとめ、発信するという流れはうまくできたが、自発的に作り出したものの発信が甘かった。伝わりやすい提示の仕方を考えていきたい。

D:チームワーク醸成力

- ・前回より自らしっかり動くことができたが、あまりチームのことができなかった。

○ 他者評価用紙のコメントから抽出（到達度を意識する他者評価）

A:自律力

- ・すごく動いていて積極的な姿勢がとても素晴らしかった。次は一步先の言われる前に行動ができるとより成長できると思う。
- ・何でもかんでも引き受け、無理してでも最高のクオリティまで仕上げてくるその力は素晴らしいが、それゆえ眠たそうな顔が目立った。

B:計画遂行力

- ・たくさんのことに対応してくれたが、もしかしたらこんなミスがあるかもと先に想定することができたらもっといい。
- ・アイデアをたくさん出してくれたけど、アウトラインをしっかり考えられていなかった。

C:コミュニケーション力

- ・困ったことにアイデアなどをくれたり、色んな人に声掛けをしたりして、とても頼りになったが、予定やスケジュールを全員に細かく伝えてほしかった。
- ・臨機応変に自分で仕事を探して動いていたが、もっと積極的に自分の意見を表明していった方が良くと思う。
- ・てきぱきと動いていて、自分の仕事をこなしていたが、1人でやってしまおうと

いうところがあったので、もっと周りに頼って、みんなと協力して行えばより良い。

- ・仕事を進んでやっていたし、他のメンバーへの気配りはできていたが、もう少しはっきり言ったら良い。

- ・やるべきことを確認し、計画をしっかりとてられていたことは素晴らしいと思うが、伝達能力はもう少しあげられるのではないか。また、予想外の出来事が起こった時もう少し落ち着いて対応すればスタッフも安心する。

D:チームワーク醸成力

- ・当日までの準備、スタッフ会議は全然協力的ではなくリーダーの補助もできていなかったが、当日の受付では笑顔で大きな声であいさつができていてとてもよかった。

- ・リーダーにまかせっきりになってしまった部分があった。

- ・リーダーの話をもっとよく聞くべき。

E:チーム指揮推進力

- ・台本の構成を作り上げたことや、計画を遂行したことはよかったと思う。しかし最終日の遅刻が非常に残念。自分が設定した時刻なら必ず守るべき。リーダーの自覚を持つべき。

- ・代表として、ほぼできていたように思えるが、経験がなかった分全体が見えていない部分があった。

- ・副代表としてある程度の信頼は得られていたが、安心感を与えられない言動をなくせばより信頼されたはず。

- ・パートを引っ張る力はあるのに自信がない。

5.2.3. ポートフォリオに関する生徒対象アンケート

12月に1年生を対象として、これまでのポートフォリオ作成・整理を振り返って答えるアンケートを行った。【資料13】

質問1に対する回答から生徒はポートフォリオを作成し始めて9か月で平均6.8枚のポケットを作っていたことがわかった。【資料14】

また、ポートフォリオを作成してきた感想より、「自分が頑張ってきたものが、ポケットの数、ファイルの分厚さという目に見えるもので測れて励みになった。」、「今までの自分の活動を改めて見返すことができ、常に目標を考えるようになりました。」のように、ポートフォリオが活動量や成長の視覚化、振り返りに役立ったという感想を持った生徒が約半数いたことが分かった。

5.2.4. 評価

7月、11月の学校説明会後のルーブリック評価と共に行った振り返りの記述より、評価の観点を構成する項目に一致する語句を用いて書かれている。このことから、今回のルーブリック評価は様々な体験活動の意義を本校の目指す教育活動として意識化させ、取組の反省を促すことに有効であったと考えられる。特に他者評価の場

合に、自己評価よりも観点ごとの評価が明確になされているといえる。より明確な自己評価を促すために、継続的なルーブリックによる体験活動の評価が必要ではないかと考えられる。

また、ポートフォリオに関するアンケート調査より、ポートフォリオを用いた様々な活動成果の蓄積・整理は、体験活動を通じた成長の可視化や、成長への自覚と長期的視野の獲得に有効であると言える。また、ルーブリックと合わせて運用することで、活動に向かうにあたっての目標設定・到達目標への意識向上につながると考えられる。

5.3. その他の活動実績

同校の研究成果の公表と普及のために、以下の成果発表を行った。

平成 27 年 1 月 27 日に文部科学省にて行われた『「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」成果発表会』に参加し、平成 25 年度から平成 27 年度までの研究成果の発表を行った。

平成 27 年 2 月 2 日に『「国際バカロレア (IB) の趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」研究成果報告会（第 16 回教育研究大会）』を同校で開催し、平成 25 年度から平成 27 年度までの研究成果の発表を行った。

6. 今後継続する取組及び課題

6.1. 「探究基礎」に関する研究開発

6.1.1. Knowledge Question に基づく多角的視点の涵養をめざした指導法の研究開発

もし TOK のようにさまざまな問いについて、より深い考察を促すのならば、各教科での「本質的な問い」の投げかけも考えられる。その教科の枠組みの本質に迫るような問い立てをし、各教科で学んだ知識を引きだし繋ぎ合わせることで、TOK のような考察に導くことも可能となるのではないか。

また、多面的な視点から問いを考える取組は、「模擬国連」などの議論の事前学習としても有効ではないかと考えられる。それぞれが抱える文脈・背景の異なる者同士で協働し、共通理解を探るような議論のためには、立場が異なれば「問い」の捉え方も異なるということを少なくとも自覚しておく必要がある。

6.1.2. EE の評価法を用いた論文の評価法の研究開発

今後も継続して、JUMP の論文評価にルーブリックを用いる。しかし、より適正な論文評価を行うためには、より多くの担当者によるルーブリックの文言の検討が必要である。また、各担当教員の評価が妥当であるかどうかを互いに評価し合うような仕組、例えばいくつかの論文をサンプリングして、全担当者で評価してみることで、評価のラインの擦り合わせを行うといった仕組みの構築が必要ではないかと

考えられる。

6. 2. 実体験を重視した生徒主体の活動に対する CAS を踏まえた評価法の研究開発

体験活動のルーブリックとポートフォリオを用いた評価は今後も継続する。特にポートフォリオについては長期的な活動の評価となるため、高校 3 年間での活動の蓄積と評価の効果を継続的に観察する必要がある。

加えて、来年度より SSH（予定）、SGH の研究指定事業として展開する、生徒の自主的活動の支援事業に、今回のルーブリックとポートフォリオ評価が応用できないかと考える。生徒が自主的に企画するプロジェクトチームや研究会の自己評価や、活動成果の公表の方法として、ルーブリックやポートフォリオが有効ではないかと考えられる。

資料1

	回	分野・単元等	授業形式	主な授業内容
4月	1	1. すべては君の「知りたい」から始まる	クラスごとに一斉授業	*探究五箇条 *メタ認知 (TOK) *クリティカルシンキング *心の理論
	2	2. 「論文」論		*論文とは何か *論証の具体的構造 *真と偽 *事実と意見
5月	3	3a. 論文の「論」は論理の「論」	クラスごとに一斉授業 3b: 情報科目授業	*説得力=妥当な推論×確からしい前提 *妥当性とは *隠れた前提 *前提の正しさ
	4	3b. データ分析と解釈		*統計データの裏を確認する *データ分析と解釈
	5	5a. 文献を入手する	クラスごとに一斉授業 5b: 情報科目授業	*文献検索 *図書館の利用法
	6	5b. データの入手と加工		*主張の根拠となるデータの入手 *Excelの使い方 *表計算, グラフの加工の仕方
6~7月		中間考査		知識の確認, 再整理の契機
	7	7. 課題設定論	クラスごとに一斉授業	*問題意識から発する問いを多角的に見つめる *仮説を立てる *仮説を証明するために必要な理由と証拠の目算を立てる
	8	8. 文献の読解と引用作法		*著作権, 剽窃 *参考文献表の作成法 *本文中の引用方法
	9	9. 論文らしい表現		*論文読み書きのルール *序論・本論・結論のロジックを組み立てる
7月	10	10. 序論は最後に	論文テーマごとに2クラスを2分割	*序論の書き方 *研究意義とは *アウトラインをパワーポイントで作る
	11	11. 発表資料作成①	クラスごとに一斉授業	*ポスター発表とは *パワーポイントで資料の作成
8月		論文作成	個人活動	論文及び発表資料の作成 堀川フォーマットに即した論文の作成
9月	12	12. 発表資料作成②	クラスごとに一斉授業	*パワーポイントで資料の作成 (*発表原稿の作成)
	13	13. 発表	本能館	*発表を通して対話する
	14	14. 論文執筆①	クラスごとに一斉授業	*論文執筆 *発表で得た気づきを論文執筆に生かす
	15	15. 論文執筆②		*論文締切

16 期生 探究基礎 HOP ワークシート

組 番 氏名

第 7 回授業：手がつかない課題は「課題」じゃない！

1. テーマ，問い，課題

①（抽象度 高）自分自身の問題意識や与えられたテーマをもつ



②（抽象度 中）「問い」を立てる(疑問文)



③（抽象度 低）「課題」としての問いになるよう整える

- ・その答えの見通し(仮説)を立てる
- ・理由づけと証拠集めのもくろみを立てる

2. 課題設定の流れ

■ 問題意識から、具体的な「問い」を立て、「課題」へつなげる手法

キーワードや漠然とした問題意識について、以下の問をぶつけ、疑問文にする。

ぶつける問	「学力低下」というキーワードに問をぶつけた具体例
本当に？[信憑性] どういう意味？[定義] いつ(から/まで)？[時間]	学力低下と呼ばれる現象は本当に生じているのか そもそも学力とは何か/どう定義されているのか いつから学力が低下しはじめたのか 以前は学力低下論争はなかったのか
どこで？[空間] だれ？[主体]	他の国では学力低下現象は見られないのか だれが学力低下現象を主張しているのか だれ(どの層の学生)の学力が低下している(と言われている)のか
いかにして？[経緯] どんなで？[状態] どうやって？[方法] なぜ？[因果]	どのような過程で学力が低下していったのか(急に？、徐々に？) 学力低下の現状はどうなっているのか どうやって学力低下現象の存在を確かめたのか 学力低下の原因は何か
他ではどうか？[比較] これについては？[特殊化] これだけか？[一般化] すべてそうなのか？[限定] どうすべきか？[当為]	教科によって(地域によって)学力低下に違いはあるか このケースは学力低下現象なのか 学力以外の能力も低下しているのではないか すべての科目で学力の低下があるのか 学力低下にどう対応すべきか

参考：戸田山和久『論文の教室 レポートから卒論まで』p.121 (NHK ブックス)

■ 課題設定の CHECK POINT

1. どのような問題に対してどのような解答を出そうとしているのかが明確か
2. その解答が解答である理由を挙げられるか
3. 理由をサポートする証拠を集めることができるのか

★練習問題 1：次の「問い」を「課題」に直してみよう

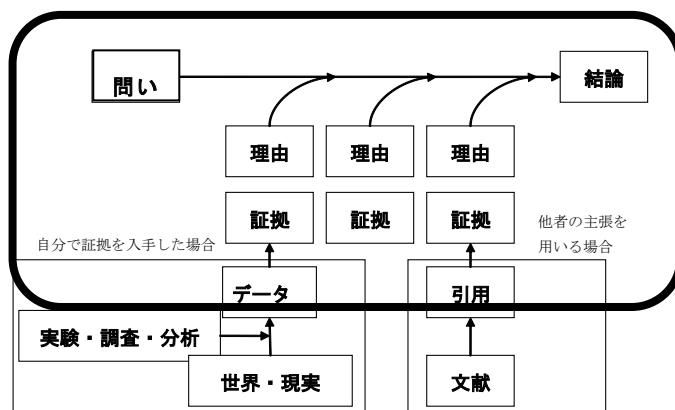
1. 高齢社会を解決するにはどうしたらよいか？

2. 原子力発電所は再稼動すべきか？

3. おさらい：「課題」を「設定」するには？

■ 「課題」とは？

■ 「問い」と「課題」



図：太線が、課題設定の段階で考慮しておくべき範囲

■ 「課題設定」とは

※文化や背景が異なれば、《

》もまた異なる。

1 第 7 回授業：手がつかない課題は課題じゃない！

—課題設定から研究方針へ—

1.1 概要

1.2 本時の到達目標と評価

1.2.1 「課題設定」について学ぶ。（HOP では一定の形が与えられるが，JUMP ではすべて自分で

- ・「課題設定」の流れをつかむ。
- ・ある「課題」が適切かどうか，探究活動につながるものかどうかを見る眼を養う。
- ・「問題意識」から「問い」を芽吹かせ，「問い」を，具体的な「課題」に育てる手法を学ぶ。

1.3 基本情報

生徒の準備物

- ・テキスト p.41-63

1.4 内容

1.4.1 「課題設定」

今回は，「手がつかない課題は課題じゃない！」

「課題設定」について学ぼう。君たちは，探究基礎において，最終的には個人研究を論文とポスターにまとめて発表する。個人研究において何を研究するのかは，もちろん君たち一人ひとりが考えるんだ。いったい何をどうやって明らかにしたい？わくわくするよね。

しかし，個人研究をするにあたって，めっちゃくちゃ苦労するのが「何をどのように明らかにするのか？」を具体的に考える「課題設定」だ。ある意味，探究活動における一番の山場であるともいえる。STEP, JUMP では自分の力で課題設定をしなければならない。

では「課題設定」って何だろう？あっさり言えば，「課題」を「設定」することだよ。

1.4.2 テーマ・問い・課題

では「課題」とは何だろう？参考までに辞書ではこのように説明されている。

参考：「課題」の意味

デジタル大辞泉の解説

か-だい [クワ-] 【課題】

1 与える，または，与えられる題目や主題。「論文の一」「一図書」

2 解決しなければならない問題。果たすべき仕事。「公害対策は今日の大きな一である」「緊急一」

大辞林 第三版の解説

かだい【課題】

① 仕事や勉強の問題や題目。「休暇中の一」 「一を与える」 「一図書」

② 解決しなければならない問題。「当面の一」 「緊急一」

課題という語句は、宿題とか、題目とか、主題とか、問題とか、広い意味を持っているね。でも、探究基礎で使う「課題」は、もちろん宿題という意味ではないよ。

Q: 単なる「問い」とどこがちがうの？ 論文の始まりは「問い」じゃないの？

A: うん。論文は「問い」を立てることから始まるよ。すべては「これ何？知りたい」から始まるからね。でも、どんな「問い」でも論文に向いているわけじゃない。理由や証拠が見つからない「問い」や、ものすごく個人的な「問い」、もうとっくに答えがわかっている「問い」などは論文でわざわざ論証したり、研究したりするものじゃない。

「テーマ」… 広い意味で使われることが多い。ここでは、課題に対して結論を述べることによって一つ新しい知見が加えられる領域。

「問い」… 疑問。探究活動の出発点。すべては「コレ何？知りたい」から始まるから…

「課題」… 理由を示して答えを導き出したい「問い」。

今回の HOP で書く論文に当てはめてみると

「テーマ」= 「空港」

「問い」= 「日本にハブ空港は本当に必要か？」

「課題」= 「？」

となる。

Q: 「日本にハブ空港は本当に必要か？」は課題じゃないの？

A: まだまだ具体性に欠けるし、明らかにする手立ての見通しがつかない。課題とは言い難い。この課題設定は後半1時間でやってみよう。

①（抽象度 高）自分自身の問題意識や与えられたテーマをもつ

↓

②（抽象度 中）「問い」を立てる（疑問文）

↓

③（抽象度 低）「課題」としての問いになるよう整える

・その答えの見通し（仮説）を立てる

・理由づけと証拠集めのもくろみを立てる

1.4.3 「課題設定」の流れ

では、課題設定って実際にはどのように行うのだろうか。

論文作成において、テーマを設定すると、そのテーマの範囲で疑問に思うこと（問い）を考える。そして、それを解決可能でより具体的な形へと磨き上げる。このように課題は出来上がっていく。

問いの抽象度を下げ、具体化していくために、ぼんやりした問題意識や、「なんとなくコレ」というキーワードに問をぶつけ（ツッコミを入れ）、疑問文を作るという方法がある。

ぶつける問	「学力低下」というキーワードに問をぶつけた具体例
本当に？[信憑性] どういう意味？[定義] いつ(から/まで)？[時間] どこで？[空間] だれ？[主体] いかにして？[経緯] どんな？[様態] どうやって？[方法] なぜ？[因果] 他ではどうか？[比較] これについては？[特殊化] これだけか？[一般化] すべてそうなのか？[限定] どうすべきか？[当為]	学力低下と呼ばれる現象は本当に生じているのか そもそも学力とは何か／どう定義されているのか いつから学力が低下しはじめたのか 以前は学力低下論争はなかったのか 他の国では学力低下現象は見られないのか だれが学力低下現象を主張しているのか だれ(どの層の学生)の学力が低下している(と言われている)のか どのような過程で学力が低下していったのか(急に？、徐々に？) 学力低下の現状はどうなっているのか どうやって学力低下現象の存在を確かめたのか 学力低下の原因は何か 教科によって学力低下に違いはあるか 地域によって学力低下に違いはあるか このケースは学力低下現象なのか 学力以外の能力も低下しているのではないか すべての科目で学力の低下があるのか 学力低下にどう対応すべきか

この方法は、曖昧な文やことばを明確にしたり、話の中の隠れた前提を見抜いたり、ステレオタイプを外して物事を見ることを可能にする効果がある。手がつかなくなつて途方に暮れちゃうような漠然とした問題意識でも、まずは抽象度②の「問い」の形にし、さらに抽象度③の「課題」となるよう磨き上げるとは、こういう手順に沿っていけば、ある程度までは可能なんだ(アルゴリズム化されている)。

ただしこれだと、そのまま使えそうなものもあるけど、いきなり③の課題設定までするのは無理な問いがあるね。特に、適切な課題設定の要件

「2. その答えが答えである理由を挙げられるか」

「3. 理由をサポートする証拠を集めることができるのか」

を満たすためには、どんな理由づけが可能で、どうすればその証拠を挙げることができるのか、ということについて君のアイデアが必要だ。

論文では理由を述べなくてはならない。探究活動に入るときに、どんな理由がありそうか、自分自身で証拠を捕まえることができるか、どんな風に証拠を挙げたらいいか、ということのアイデアが、課題設定に大きく関わってくる。だからアイデアを捕まえる技術はSTEPでも学ぶよ。でも、このアイデアを捕まえる力量は、実は知識量に大きく依存する。ふだんの生活や教科の学習の質がここでは大きく影響する。「常識を学べ」ということだね。「常識」という裾野が大きく広いほど、レベルの高い「課題設定」が可能になる。

1.4.4 その「課題設定」、適切ですか？

論文で扱うにふさわしい課題とはどのようなものだろうか。例えば、「権利とは何か？」というのは論文で扱うにふさわしい課題ではない。

適切な課題は、次のような性格を持っている。

性格 1. 理由を述べて、証拠を示すことが可能

性格 2. 「問い」が、どのような分野にどういう意味を持ちそうか、という文脈(展望)が明確
性格 3. 「答え」が、もうすでに存在しているものではない

Q:ふうん。でも、答えをサポートする証拠があるかどうかは調べてみないとわからないのでは？

A:その通り！だから、「一旦課題設定完了！」と思っても、研究の進行につれて課題を設定しなおしていくことはほぼ必ず起こる。むしろそれが普通です。証拠を文献に頼ろうが、データに頼ろうが、それは同じこと。つまり「手と頭を動かせ」。

Q:ということは、調べているうちに、最初に思っていたのと違う方向に行くとか、結論を変えたいくなることも？

A:もちろん。

Q:「問い」が育つのを待っていると「課題」になるの？

A:「問い」は勝手には育たない。育てるんだよ。「課題設定」とは、「問い」を上のような性格を備えた「課題」に育てること。特に、性格 1 を備えることが絶対条件だ。具体的な証拠を示すことができるように、「問い」の曖昧な点にツッコミを入れて、具体化していこう。

Q:そうかー。でも、自分でうまくできるか不安です。

A:その課題設定が適切かどうかを、自分でチェックするときのポイントがあるよ。

1. どのような問いに対してどのような解答(結論)を出そうとしているのかが明確か
2. その解答が解答である理由を挙げられるか
3. 理由をサポートする証拠を集めることができるのか

※ただし「よい課題設定とは」という問いは、ここではあくまで、解決へ向けた具体化がなされているか、という観点に絞る。よい論文に求められる内容のオリジナリティはここでは扱わない。

それでは、課題設定の練習！「問い」の曖昧な点にツッコミを入れたり、チェックポイントと照らし合わせたりして、「問い」を「課題」に磨き上げてみよう！

★ 練習問題1: 次の「問い」を「課題」に直してみよう

1. 高齢社会を解決するにはどうしたらよいか？

「高齢社会」の定義は？…65 才以上の人口の占める割合が 7%-14%=高齢化社会
14%-20%=高齢社会
21%以上=超高齢社会らしい。
(日本は 2007 年に超高齢社会に突入)
何をもって「解決」とするのか？…年金面？医療面？社会保障面？人口比率の調整施策？

2. 原子力発電所は再稼働すべきか？

立場の違いによって設定される課題が異なってくる。

電力会社からの視点？原発周辺の住民からの視点？国家からの視点？
また、「べきか？」という問いには何らかの価値判断が含まれる。いったいどういう価値で見た問いなのか明示されていないと解答の出しようがない。経済的？生命の保全？特定の団体の利益？

※立場や背景が異なれば、解決すべき課題もまた異なる。問い立てや課題設定には抱えている文化や背景、文脈などがかわる場合が多い。

1.4.5 ここまでのまとめ

Q:課題設定って、思いつきじゃできそうにないな。いろいろ回り道も必要なんですね。

A:そうだね。少しまとめよう。これまでの図での対応でいうと、「課題設定」は問いと答え(結論)の部分を明確に含んでいるだけでなく、理由や証拠、それら入手する見通しまでを含む行為だね。これを、実際に探究活動をすすめるまえに、視野に入れつつスタートしなきゃならない。ちょっと難しいよ、と最初に言った理由はこれなんです。

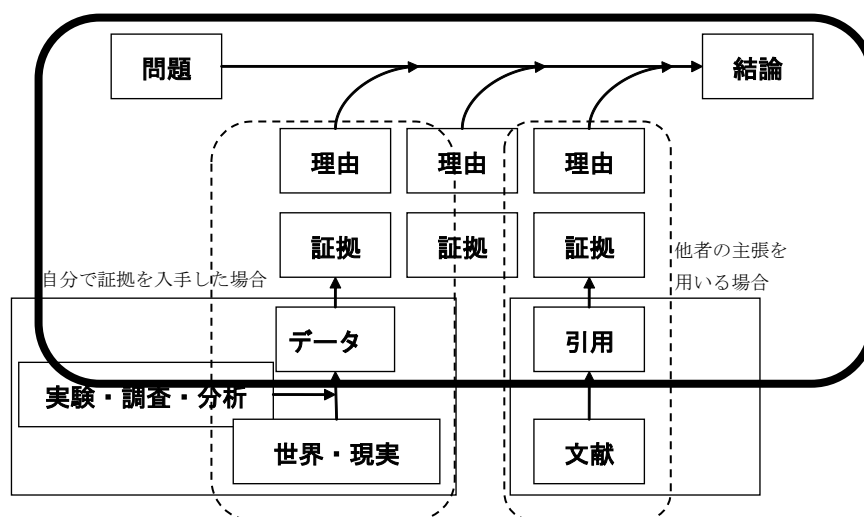


図:太線が、課題設定の段階で考慮しておくべき範囲。

探究基礎で使う「課題」とは、理由を述べて答えを導き出したい「問い」をいいます。

課題設定とは、理由を述べて答えを導き出したい「問い」を設定すること。ただし、理由と証拠をあげて説明できる見通しをつけることが絶対条件。

Q:なんかめんどくさそう…。「課題設定」って、論文作成や探究活動にどうしても必要ですか？

A:必要。論文という文章は、探究したことを報告する文章だ。調べ学習のレポートとはちがう。調べ学習では、「問い」が与えられて、すでにある答えを調べて、その内容を報告するけど、それは探究じゃないよね。

探究とは、「問い」を自分で設定し、その「問い」の「答え」がこれだ！ということを証拠付きで理由づける営み(行為・作業)だ。この世界の「知」(「常識」)を一步進める行為といえる。どんな「問い」にどんな「答え」を出していこうとするのか、ということを取りあえず決めないと探究が始まらないし、論文作成も進まない。「課題設定」は避けて通れないと思ってください。

では、4時間目はHOP論文のキーワード「空港」についての「常識」を学び、その「常識」を踏まえたうえで、課題設定を行ってみよう。探究基礎委員が、下調べをしてくれている。彼らがキーワードに関するプレゼンテーションをしてくれるから、基礎知識を共有しよう。

HOP論文では「問い」は設定されているけど、いずれJUMP論文では自分で「問い」を立てていかなくちゃならない。だからみなさんには、このHOP・STEPの授業を通して問題意識にたくさん出会い、「問い」を具体化して「課題」を設定する力を身につけて欲しい。この力をつけようと思ったら、この授業だけでは練習が足りない。よって普段の生活や教科学習で、「〇〇である(と考えられている)」というようなことに出会ったら、実際にこういった問いをぶつけてみる、また(「それがどうやって確かめられたのか?」「誰が言っているのか?」など)ということを考えること。

【4時間目】

1.4.6 課題設定してみよう

■ 探究基礎委員のプレゼンテーション(5分)

↓

■ HOP論文では、「空港」がキーワードだそうですが、じゃあ「問い」は?

⇒「日本にハブ空港は必要か?」

↓

■ 「ハブ空港」の常識プリント配布

↓

■ 2つの視点に別れる

抱えている文化や背景、文脈が異なれば解決すべき課題もまた異なってくる。異なる立場から考えたときに、同じ問いに対しても違った課題が生まれうるということを自覚しておくことは、実際に広い社会に出たときにとても重要になってくる。

これは先ほど、前半にやった練習問題で「原子力発電所は再稼働すべきか?」を「課題」に直したときに実感したのではないだろうか。

ここでは、「国家」の視点と、「航空業界(航空会社)」の視点でクラスを2つに分け、「日本にハブ空港は必要か?」という「問い」を実際にそれぞれの視点から考えたときにどのような「課題」が設定できるかを、グループで考えてみよう。

↓

■ グループワークへ。

★グループワーク: 課題設定シートの上半分を用いて、それぞれ与えられた視点から「日本に本当にハブ空港は必要か?」という問いを課題にしてみましょう。

※前半に行った練習問題と同じように、「問い」の曖昧な点を指摘したり(ツッコミを入れたり)、問いに関する常識(探基委員さんの常識プレゼンなど)を挙げたりして「問い」を具体的な課題に落とし込もう。

↓

■ グループで出た課題を交流する。

↓

■ 実際にこれから作成していく論文の課題を発表する。

《国益》「日本の空港をハブ空港化するならどの空港が最適か」

《航空業界》「羽田空港のハブ化は日本の航空業界に利益をもたらすか」

↓

■ それぞれ課題設定シートの記入済みのものを配布する。

※次回から課題設定シートの下半分を作成していくことを指示する。

課題設定シート

問い《

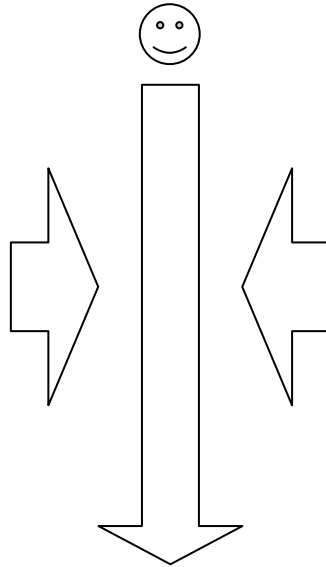
》

観点《

》

問いの曖昧な点を指摘せよ。

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

問いに関する常識を挙げよ。

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

課題《

》

仮説（ひとまずの答え）《

》

仮説（ひとまずの答え）を言うために必要そうな理由を挙げよ。

- ①
- ②
- ③

理由を補助する証拠となりそうなデータ・引用を挙げよ。

- ①
- ②
- ③
- ...

左で挙げた証拠の入手元を明示せよ。

- ①
- ②
- ③
- ...

資料5

()ゼミ ()組 ()番 氏名 ()

※この評価と添削を参考にして、永久保存版論文の修正に取り組みましょう。

JUMP論文ループリック		到達度		
		3	2	1
観 点	探究課題	導入部分に、解決可能かつ一般に価値があり、研究意義が明確な探究課題が示されている。	導入部分に探究課題が明示されているものの研究意義が示されていない。あるいは、解決できそうにない。	導入部分に探究課題が示されているが、問題意識が個人的すぎる、あるいは調査可能な範囲に既に存在している。
	調査・研究方法	探究課題の解決に適した、創意的あるいは、緻密な調査・研究方法が論文に示されている。	探究課題の解決に適した、調査・研究方法が論文に示されている。	探究課題の解決に適した、調査・研究方法が論文に示されていない。
	学問領域に関する知識・理解	用語の使用が正確であるなど、学問領域に関する優れた知識と理解が、論文に示されている。	学問領域に関する知識と理解が、論文にある程度示されている。	用語の使用が不正確であるなど、学問領域に関する知識や理解が論文に示されていない。
	考察・分析	収集した資料などの根拠を基に、探究課題に適した、説得力のある考えが論理的かつ明晰に示されている。	収集した資料などの根拠を基に、探究課題に適した議論をしようとしているが、表面的なものにとどまる。	収集した資料などの根拠から、議論を発展させようとしていない。
	結論	探究課題に呼応しており、かつ課題として扱っている範囲に対して過不足のない結論が示されている。	探究課題に呼応しているものの、言い過ぎていたり、扱い切れない結論が示されている。	探究課題とは無関係な結論が示されている。

※備考

--

JUMP 論文ルーブリックについて

2014.4.18. 企画研究部

探究ノートに記載している JUMP 論文ルーブリックについて、ご説明します。

1. ルーブリックとは

ルーブリックとは、一般的に、“ある活動を評価する際の指標（規準・基準）”のことをいいます。活動を複数項目に分解した観点とその達成の度合いを示す到達度、そしてそれぞれの到達度において予想される活動の特徴を示した文言から構成されています。パフォーマンス評価の方法の 1 つです。

それではパフォーマンス評価とは何でしょうか。松下(2007)は「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品を、直接的に評価する方法」と述べています。

「探究基礎」を上記パフォーマンス評価の定義に代入するならば、

学力を可視化する課題＝論文 質を解釈し量化する評価方法＝論文のルーブリック
--

となるでしょう。

「探究基礎」で導入する論文のルーブリックでは、論文を構成する要素を「探究課題」「調査・研究方法」「学問領域に関する知識・理解」「考察・分析」「結論」の 5 つに分解し、その 5 つを評価の観点としています。そして、5 つの観点について 3 段階の到達度を設けて、それぞれの段階において予想されるパフォーマンスの特徴を文言で示しています。

2. なぜルーブリック？

「探究基礎」において、生徒は探究の成果を論文にまとめています。この発表や論文の評価には、学問領域ごとに開設されるゼミの担当教員が当たりますが、現在の評価方法では教員間で評価規準の解釈に差異が生じたり、扱う領域によっては活動内容との整合性が取れなかったりといった問題が生じていました。また、基準や目指すべき到達点が不明瞭であり、生徒に評価を還元し、より高次のレベルの論文を目指すための指針となるようなものとするには不具合があったのではないのでしょうか。

生徒の活動の質を、明確な到達度と観点、文言に従って数値化し、生徒に還元するルーブリックは、これらの課題を解決するために有効と言えます。

3. JUMP 論文ルーブリックの取扱説明

論文やその途中経過について、その質をルーブリックによって評価します。論文制作の過程における面談などの際に、生徒の論文の質がどこまで来ているのか、そして次に向けてどうするのか、到達度を生徒に具体的に還元することが好ましいです。

論文の質の解釈は主観的にならざるを得ませんが、複数担当者で評価に当たることによって主観性を担保します。この点についてはこれまでと同様です。

また、ルーブリックを用いた実践事例では、「ルーブリックの文言を熟読し認識した生徒と、読んでいない生徒では活動の達成度に差が出ている」*1ことが言われています。論文執筆開始時には、このルーブリックを生徒に提示し、特に最高到達度の文言については熟読させることが重要でしょう。ルーブリックには、生徒にあらかじめ到達目標を明示し、活動の指針とさせる機能もあります。

4. 留意事項

ルーブリックには質的なものを数値化する働きがありますが、数値化したものを以下のプロセスのように抽象化することにはルーブリックは適しいと言われています。

個々の生徒の論文→ 特徴の抽出→ 数値化→ 観点別得点→ 合計点→ 集団の平均点→ 集団間の順位
--

よって現段階では、いわゆる「評価の4観点」との関係は考えません。すなわち最終の成績評価の対象とはしない予定です。あくまで個別具体的な「課題＝論文」の質を可視化し、その指導に用いるものです。

5. 参考文献

松下佳代. (2007). パフォーマンス評価, (日本標準ブックレット No. 7). 日本標準.

香川大学附属高松小学校. (2010). 活用する力を育むパフォーマンス評価. 明治図書.

松下佳代. (2012). パフォーマンス評価による学習の質の評価. 京都大学高等教育研究, 18: pp. 75-114.

*1 2013年12月7日に開催された玉川大学国際バカロレア教育フォーラムでの、渡辺康孝玉川学園高等部教諭の講演より。

堀川高校での体験活動を通して自立する 18 歳を目指そう！ ～「体験活動ルーブリック」と「ポートフォリオ」の活用～

0. 体験活動で「自立」を目指す？

「体験活動」とは、数学や国語といった教科以外での、実体験に基づく活動全般の内、集団で行う活動の総称です。堀川高校では、探究基礎委員会や海外研修委員会、クラブ活動など、教科以外の活動も、教科での学習と同じくらい大切な活動として、多くの先輩たちが懸命に取り組んでいます。

教科での学習は、テストや定期考査で学習の到達度を測り、次の目標をさだめ取り組むことで、より高度な問題をも解決できる力を得ることができます。このことは、皆さんにとっても実感のあることだと思います。私たちは、委員会活動やクラブ活動、スタッフ活動などの「体験活動」についても、実は一定の規準で到達度を振り返ることで次の課題が見え、自ら力を伸ばしていくことができますと考えます。

でも、「体験活動」と一口で言っても、例えば探究基礎委員会を中心に活動する人もいれば、体育会系の部活動を中心に活動する人もいるといったように、人によって活動も目的もさまざまですよね。その力をどうやって測り、振り返ればよいのでしょうか。

私たちは、そのような一見バラバラであるような体験活動も、実はすべての活動が最高教育目標の「自立する18歳」につながっているととらえています。よって、体験活動の最終到達点を“「自立する18歳」に必要な力を習得すること”に定め、その最高目標から鑑みた時、自分が今どの地点にあり、次に何を目標せば良いのかを、「体験活動ルーブリック」という評価表により具体的に示しています。活動をする皆さんは、活動に参加するたびに、自分の到達点をルーブリックを用いて振り返り、次の目標を立てて活動をしていくことになります。

また、それらの活動における「評価用紙」や成果資料は「ポートフォリオ」として高校3年間かけてファイリングしていきます。それは、堀川での活動による成長を、3年間の活動成果をとおして長期的に確認し、卒業後の目標を見出す資料となります。

皆さんも体験活動に積極的に参加し、かつ「体験活動ルーブリック」による評価と「ポートフォリオ」の作成によって「自立する18歳」に必要な力を身につけていきましょう。

1. 「ルーブリック」って何だろう？

「ルーブリック」とは、一般的に“ある活動を評価する際の指標(規準・基準)”のことをいいます。

堀川高校では、0章でも述べたように、人によってさまざまな体験活動を堀川高校の教訓や教育目標、つまり「自立する18歳」に向けた活動とするために、ひとつの到達目標を定めています。その到達目標を評価指標として示したものが「体験活動のルーブリック」です。そこでは、体験活動を通じて身につけるべき力を、「自律力」「課題推進力」「応用力」「コミュニケーション能力」「チームワーク形成力」の5つの力に集約し、その到達点を「基本点(ベンチマーク)」「中間指標(マイルストーン)」「到達点(キャップストーン)」で表し、それぞれの時点で達成すべき目標を示しています。皆さんは、現在、自分がそのどの位置にあるのかをまず考え、次に自分の目指す目標点を定め、活動をおこなうことになります。まずは、「体験活動ルーブリック」に書かれた内容をよく読んで、それぞれの時点でどのような力が求められているのかを理解しましょう。

2. ルーブリックの使い方

体験活動には、3年間続く部活動や、1年間の委員会、あるプロジェクトだけに特化したスタッフ活動など、継続期間もさまざまです。

でも、基本的にルーブリックによって評価する活動は、どんなに長期間継続する活動であっても、ある一定の期間で活動を区切り、その区切られた活動について評価をおこなうことになります。例えば、体育会系であれば、ある大会までの期間について、

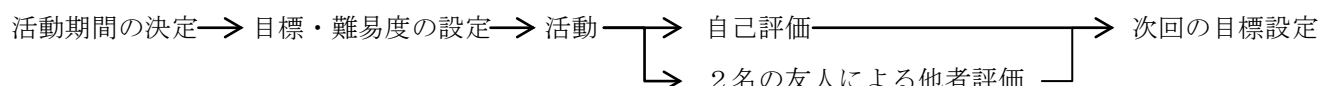
委員会なら“まとめの会”や“発表会”までの期間、というように何らかの成果が出る時点を基準に期間を区切るのです。そして、その区切られた期間に行う活動をプロジェクトと呼びます。

ある目標となる期間が定まったら、そこまでの目標を設定します。別紙の「体験活動ルーブリック」をじっくり読みながら、「自己評価用紙」に目標、難易度を書き込み、この活動において自分が何を目標とするのかを自覚した上で活動に臨みましょう。

活動が終わったら、すぐに自己評価をおこないます。活動を再度振り返りながら、「自己評価用紙」の項目を埋めていってください。そして、次回は何を重点的におこなうのか、つまり次回の活動の目標を定めておいてください。

また、同じ活動をおこなった友人2名を任意に指名し、自分の名前やプロジェクト名を書いた上で「他者評価用紙」を手渡し、評価してもらってください。自己評価は他者評価を参考にしても構いません。

「体験活動ルーブリック」での評価の流れ



3. 体験活動の「ポートフォリオ」を作ろう！

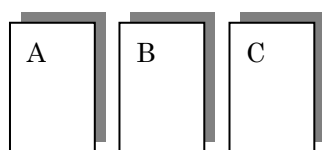
0章でも少し述べたように、「ポートフォリオ」とは、体験活動での成果資料を、活動者本人が蓄積していったファイルのことを言います。まずは、皆さんに既に配布されたファイルに、「自己評価用紙」と「他者評価用紙」、活動で得た成果資料を、気軽にどんどんはさんでいってください。その時、下の図のように、同じ活動の成果資料については、できる限り同じ「クリアポケット」に入れておき、評価用紙と同じ記号を付しておきます。ファイルがいっぱいになるまでは、とにかく何も考えずにどんどんはさんでいきましょう。そして、一定の期間が過ぎた後、自分にとって良い意味を持つと思う資料だけに整理をし、堀川高校での3年間の活動が一冊のファイルに収まるようにします。3年間経った後に、見直した時には、自分がこの活動を通してどれほど成長できたかが実感できるはずです。

この「ポートフォリオ」は、堀川高校では従来のいわゆる成績のためのものではありませんが、一般的には就職活動などの自己PRの資料として多く用いられてきたものです。近年、大学の入試でも自己推薦文を求められることが多くなっています。そういう意味でも、堀川高校で学力以外に何を身につけることができたのかが一目でわかるファイルが手元にあるのは、有意義だと言えます。

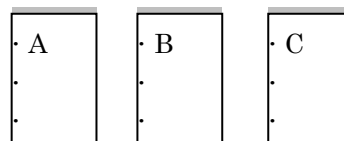
「ポートフォリオ」のファイリング方法



指定のファイル



自己評価用紙と
他者評価用紙をセットにして。



成果資料は、
活動毎のクリアポケットに。

「ポートフォリオ」は、指定のファイルに、自己評価用紙と他者評価用紙を活動毎にまとめたものを前半に、後半に活動の成果資料をまとめたものをファイリングします。評価用紙を前半にまとめる意味は、評価用紙だけを並べて成長の過程をみるためです。

4. すべては自己評価とチームメイトによる評価から

「体験活動ルーブリック」による評価も「ポートフォリオ」の作成も、基本的にはすべて生徒の手で完結します。つまり、自己評価と活動を共にした友人からの評価により、活動の成果を評価し次の活動へと向かう目標を定めていくことになります。そこに教師からの評価は含まれません。

自分の手で自分の活動を客観視し、他者との共同作業の中で自分の人生をコーディネートしていく、そんな力が身につくこと、それが、堀川高校の求める「自立」した生徒像なのです。

堀川高校での体験活動「ポートフォリオ」を作ろう！

あらためて…「ポートフォリオ」とは？

「ポートフォリオ」とは、自分が行なった活動のさまざまな資料を、活動者本人が蓄積していったファイルのことを言います。

たとえば、身近なものなら、写真のアルバムやブログ、Facebook などの個人サイトなども、ある意味「ポートフォリオ」と呼べるかもしれません。写真のアルバムを家族や友達の間で見せ合った経験はありますか？「そうそう！この時こんなことがあったよね！」とか「この時は、誰それとこんなことを話したんだ！」「〇〇ちゃんは、まだこんなことができなかったんだよ！」など、その時の記憶が鮮明に蘇って、話がはずむと思います。そして、あれから長い年月がたったな、そう言えば自分も結構変わったかもしれない、なんて今の自分と比較してその成長に目を見張ることだってあるかもしれません。

こんな風に写真や自分の書いたちょっとした文章や、思い出の品などを、ある一定の期間、ファイルに残して、自分の歩んできた軌跡を振り返るためのファイル、このファイルのことを、「ポートフォリオ」と呼ぶのです。

堀川高校版「ポートフォリオ」はこれ！－

◆体験活動「ポートフォリオ」

堀川高校では、さまざまな体験活動（各種委員会活動、スタッフ活動、部活動、クラス活動など）についての「ポートフォリオ」を作成します。

用意されたファイルに、まずは、どんどん活動で作った資料や写真などをファイリングしていきましょう。はさむ資料は、基本的に何でもOKですが、できる限り自分の書いたものや自分が写っている写真など、自分の活動の様子が後で見てわかるものを残しましょう。後で見て楽しめるファイルを作成してください。

◆体験活動「ポートフォリオ」作成の意義

体験活動「ポートフォリオ」は、いわば教科以外の成績表のようなもの。自分の活動の推移が目で見えて確認できるようになります。そして、一定期間を経たのちに、活動の軌跡を振り返ることで、自分の成長を確かめ、次にどの方向に進むべきか、どんな活動をしていくべきかがわかるようになるのです。

3 年間「ポートフォリオ」作りを継続することで、堀川高校での 3 年間に行った体験活動であなたは一体何を得たのか、高校生活にはどんな意味があったのかを実感することができると思います。

◆ファイリングの仕方

＊基本的には、ひとつの活動について、1 枚か 2 枚のクリアポケットを利用する。

（委員会活動や部活動など、活動が長期にわたるものは、プロジェクト・活動の区切り毎に。）

＊クリアポケットの表には、油性ペンで活動を書き込んで、何の資料かがわかるようにしておく。

＊各活動の振り返り用紙も、同様にファイルしておくこと。

＊資料は、一定の期間の後、LHRなどの時間を用いて整理・評価をします。自分が参加した活動については必ずファイルしておくこと。

注：「クリアポケット」や「油性ペン」は、各クラスに置いてあります。必要な時に利用してください。

◆ 今後の予定

入学して4か月がたとうとしています。みなさんのポートフォリオファイルには、どのような資料が集まっているでしょうか。花背山の家での活動記録、遠足準備の資料、球技大会のメンバー表、学校説明会スタッフ活動、講演会の感想、部活のノートや試合の記録…。こうしたものがある人もいないのでしょうか。たった4か月を振り返るだけでも、ほんとうにいろんなことをしましたね。また、体験活動だけではなく、進路についてのガイダンスを受け、自分の進路や適性について考えた「夢ナビ」も、そうした資料に入っているかもしれません。

夏休みは、入学後の自分の活動を振り返り、また校外・校内での多くの活動に参加していける時間です。ポートフォリオに集積する資料も、増やしていけるいい時期ですので、下記の表を参考に、作成を進めていってください。

<こうした活動もポートフォリオにできますよ！>

時期	活動例
済	花背山の家での活動記録、遠足準備の資料、球技大会(しおりや思い出のメンバー表)
通年	<u>もらった資料、つくった書類、気づいたメモ、撮った写真、事後の感想文などなど</u> 部活動・生徒会 探究基礎委員の活動 進路資料 教科の学習での作品 (STEP から)ゼミ長としての活動 「夢ナビ」 海外研修関連 クラス活動(委員会や係)
7月	学校説明会スタッフ活動、探究道場スタッフ活動、HOP 全体会
8月	部活動、合宿、文化祭、SSH 研究発表会(横浜)、オープンキャンパス参加、職業体験
9月	探究基礎研究発表会見学、体育祭、HOP まとめの会
10月	探究道場スタッフ活動

入学後、半年を過ぎた 11 月の3者面談では、2年次のコース選択についても話し合うことになります。その場で、自分がどのような学問や活動に関心を持ち、どのような進路を希望するのか、ポートフォリオを見ながら話し合えるように準備をしていきましょう。10 月下旬にはポートフォリオを一度、自分で整理します。思い出すのにいるもの、いらないものを整理しながら、みなさんがこの半年を充実した時間として振り返ることができるのを願っています。

◆ ファイルがもういっぱい…パンパンになったら！？

予定より少し早いですが、あなたはもう整理をする時期に来ています！ 素晴らしいです。

それでは、あなたの活動の振り返りに大切だと思える資料を、自分で選別していって、もう不要ものは捨て、サイズダウンさせてください。そして、「あの活動は、こうだったな」と、現在におけるあなたの振り返りを、簡単なメモにしてポケットに入れ、活動日と振り返った日付を必ず記入しましょう。楽しいものができますように。

わからないことがあったら、企画研究部(吉谷・山上)へ

■ 学校説明会（7月） スタッフ活動振り返りシート

資料 9

年 組 番（氏名）

活動期間 月 日（ ）～ 月 日（ ）

パート名

担当した係

具体的な仕事の内容

自己評価

今回の係の仕事を通して、自分が最も活躍できた・貢献できたと感じた場面（シーン）とその原因

今回の係の仕事を通して、改善が必要だったと感じた場面

今回の係の仕事を通して、伸ばすことができた（伸ばすために努力した）と思う力を書いてください。

1 年生は各担任の先生へ提出，2 年生はパートリーダー代表へ提出→ 企画研究部（吉谷）へ 7月30日（水）までに

堀川高校学習者達成目標

校訓 立志 勉勵 自主 友愛

最高目標 自立する 18 歳

堀川高校憲章(Since 2008.10.20)「ひとつになる 高みをめざす ひとりになる」

◎ 私たちは、多様な存在や価値を大切にし、時間と力を重ねて、ひとつになることをめざします。

◎ 私たちは、よりよいものを創出することを求め、困難に立ち向かい、工夫を重ねて、一層の高みに向かうことをめざします。

◎ 私たちは、誇り高く生きることを願い、自己を見つめ、力を蓄えて、自覚したひとりになることをめざします。

体験活動 自己評価ループリック

■体験活動名

■あなたの役割

■活動期間 2014 年 月 日 () ~ 月 日 ()

■活動内容

記入日

指標●★ 月 日 ()

評価◆ 月 日 ()

提出締切 月 日 ()

	大項目		大項目の説明	キャップストーン（到達点）	マイルストーン（中間指標）	ベンチマーク（基本点）	
				3	2	1	0
評価の観点	A	自律力	役割の認識・遂行 臨機応変な対応 他のメンバーへの気配り	自分に与えられた役割を遂行するとともに、 他のメンバーの活動も助けつつ 、活動の目標達成に向けて積極的に行動することができる。	活動の目標達成に向けて、与えられた役割を果たすだけでなく、必要に応じて 臨機応変に対応 することができる。	活動の目標達成に向けて、 与えられた役割を理解 し、行動することができる。	与えられた役割を理解し、行動しようという意欲がない。
			自己評価				
	B	計画遂行力	G:目標を見定め P:計画を立て D:実行し C:評価し A:改善を図る力	活動の目標を実現するための計画を自ら立て、場合によっては自己評価し 改善を図りつつ 、 期日までにやり遂げ ることができる。	活動の目標を達成するために必要な事項を自ら整理し、 自ら計画を立て 、実行に移すことができる。	与えられた課題を 計画的に遂行 し、与えられた 期日までにやり遂げ ることができる。	与えられた課題を期日までに行うことができない。
			自己評価				
	C	コミュニケーション能力	向き合う姿勢 共感的態度 自分の意見の表明 建設的な話し合い	相手の意見を尊重しつつ、自分の意見も積極的に伝え、かつ 合意に向けて建設的な話し合い をすることができる。	相手の立場に立って 共に考える姿勢 を保ちつつ、 自分の意見も伝える ことができる。	話を聞く時に、相手に目線を合わせ るなど、 相手と向き合う姿勢 を作ることができる。	相手と話をする姿勢をとることができない。(黙る。目を上げない。興味のない態度、不満な態度をとる。など)
			自己評価				
	D	チームワーク醸成力*1 (フォロアーのみ)	肯定的な態度 リーダーの補助 メンバー支援	リーダーを補助する役割として、共に活動するメンバーに対して、 絶えず励ましや支援を行う ことで、チーム内に一体感を生み出すことができる。	活動への自主性だけでなく、チームをけん引する リーダーの役割を認識 し、その活動を積極的に支持し助けることで、チームの均衡を図ることができる。	協働で行う活動や、 チームのメンバーに対して、常に肯定的な態度を示し 、自主的に活動に参加することができる。	活動に対して否定的な態度を示す。 チームの一部のメンバー(またはすべてのメンバー)に対して敵対的な態度を示す。
			自己評価				
	D'	チーム指揮推進力*1 (リーダーのみ)	安心感を与える 信頼感を与える 尊敬される言動	活動に積極的になれないメンバーに対しても積極的に声をかけ参加を促すこと により、 チームの全員が一丸となって 、活動の目標に向けて取り組む雰囲気を作り出すことができる。 メンバーに 尊敬されるような言動 をとることができる。	メンバーの仕事の遂行状況を絶えず把握し、助言を行うこと により、メンバーの意欲を喚起することができる。 メンバーに 信頼感を与える ことができる。	活動全体の役割を把握し、メンバーに 平等に仕事を振り分けることができる 。 メンバーに活動の目標、および各自の役割を理解させることができる。 メンバーに 安心感を与える ことができる。	活動の目標を理解することができない。 活動に向けて事前に準備をすることができない。
			自己評価				
			記入例	★（活動前の目標はここ） ←..... ◆（活動後の自分はここまできた印） ←..... ●（活動前の自分の位置）			

*1 D「チームワーク醸成力（フォロアーのみ）」と D'「チーム指揮推進力（リーダーのみ）」は、役割によってどちらかを選択する。

「体験活動ルーブリック」による他者評価用紙

【留意すること】

- * 評価の依頼者は、プロジェクト終了時、ともに活動したメンバーから評価者を任意に2人選出し、用紙に記入してもらう。
- * この評価用紙は、自己評価シート（桃色）とともにポートフォリオにファイリングしておくことを勧める。
- * 依頼された人（評価者）は、評価を依頼した人の成長に向けた行為であることを自覚し、
正当な判断に基づく評価を心掛けること。（賞賛すべき点、課題とすべき点を共に加味する。）

プロジェクト名

プロジェクトの期間 2014 年 月 日（ ）～ 2014 年 月 日（ ）

評価者 年 組 番 プロジェクトにおける評価者の役割

	大項目	大項目の説明	評価指数 達成率によって、指数に＋、 －を指数につけてもよい。 (例 3 ⁺ 、3、3 ⁻)	評価に関するコメント (ここが素晴らしかった、もっとこうすれば良くなる等)
A	自律力	役割の認識・遂行 臨機応変な対応 他のメンバーへの 気配り		
B	計画 遂行力	G:目標を見定め P:計画を立て D:実行し C:評価し A:改善を図る 力		
C	コミュニケ ーション 能力	向き合う姿勢 共感的態度 自分の意見の表明 建設的な話し合い		
D	チーム ワーク 醸成力 (フォロアーのみ)	肯定的な態度 リーダーの補助 メンバー支援		
	チーム 指揮 推進力 (リーダーのみ)	安心感を与える 信頼感を与える 尊敬される言動		
評価対象者の 活動全体 へのコメント (評価できる点、 課題とすべき点 など)				

■提出期日 2014 年 月 日（ ）

■提出先

- ・依頼者は、メンバーに書いてもらった評価用紙2枚の上に、自己評価シート(桃色)を重ねて3枚一緒に提出です。
- ・各パートリーダーは集約の際、桃色の紙と青色の紙を重ねたまま、(仕分けをせずに)提出してください。

第 7 回授業：手がつかない課題は「課題」じゃない！

1. 探究基礎委員の発表内容について、記入してください。

◇ 自分の「常識」の幅を広げることができた点

◇ もう少し深く知りたかった点

2. 探究基礎委員の発表の仕方について、記入してください。

◇ 聞きやすかった、分かりやすかった点

◇ 伝わりにくかった点

3. 課題設定において、多面的な視点から問いをとらえることは、今後どのような場面に生きてくると思いますか。

資料 13

■ 16 期生ポートフォリオに関するアンケート【自己評価シート裏面】

企画研究部

ポートフォリオ作成・整理を続けていますが、現在のあなたのポートフォリオについて
 教えてください。

① ポートフォリオのポケットは、いまいくつできていますか？	枚
② そのポートフォリオの中には、何の体験活動が入っていますか？ 該当の番号をすべて○で囲んでください。 <div style="margin-left: 40px;"> 1 花背山の家スタッフ活動 関連 2 学校説明会スタッフ活動 関連 3 探究道場スタッフ活動 関連 4 探究基礎 関連 5 海外研修 関連 6 クラス活動（委員会・係） 7 生徒会活動 8 部活動 9 進路資料（夢ナビ、オープンキャンパスの資料など） 10 教科の学習での作品 11 その他（ ） </div>	
③ ②で「2 学校説明会スタッフ活動」を選んだ人にお聞きします。 体験活動のなかで、自分が最初に設定した目標を意識できましたか。 該当の番号を○で囲んでください。 <div style="margin-left: 40px;"> 1 十分できた 2 できた 3 あまりできなかった 4 まったくできなかった </div>	
④ 体験活動のなかで、特に意識している目標はどれですか。 該当の番号を○で囲んでください。【複数可】 <div style="margin-left: 40px;"> 1 自律力 2 計画遂行力 3 コミュニケーション能力 4 チームワーク醸成力 5 チーム指揮推進力（リーダーのみ） </div>	

■ ポートフォリオを作成した現在の感想を書いてください

.....

.....

資料14

■ ポートフォリオアンケート(16期生)結果総計

質問項目	全体	1組	2組	3組	4組	5組	6組	回答数
① ポートフォリオのポケットは、いまいくつできていますか？【平均】	6.8	6.6	9.5	2.7	6.2	7.3	6.3	192
② そのポートフォリオの中には、何の体験活動が入っていますか？ 該当の番号をすべて○で囲んでください。【集計値】								198
1 花背山の家スタッフ活動 関連	146	24	24	17	17	32	32	
2 学校説明会スタッフ活動 関連	136	27	27	12	12	29	29	
3 探究道場スタッフ活動 関連	10	5	5	0	0	8	8	
4 探究基礎 関連	80	15	15	0	0	25	25	
5 海外研修 関連	126	25	25	10	10	28	28	
6 クラス活動（委員会・係）	66	13	13	2	2	18	18	
7 生徒会活動	2	0	0	0	0	1	1	
8 部活動	24	5	5	2	2	5	5	
9 進路資料（夢ナビ、オープンキャンパスの資料など）	94	16	16	1	1	30	30	
10 教科の学習での作品	14	6	6	0	0	1	1	
11 その他（ ）	72	12	12	8	8	16	16	
③ ②で「2 学校説明会スタッフ活動」を選んだ人にお聞きします。体験活動のなかで、自分が最初に設定した目標を意識できましたか。								135
1 十分できた	39	5	8	2	12	6	6	
2 できた	89	23	17	9	9	21	10	
3 あまりできなかった	7	0	1	0	0	4	2	
4 まったくできなかった	0	0	0	0	0	0	0	
④ 体験活動のなかで、特に意識している目標はどれですか。 該当の番号を○で囲んでください。【複数可】 【集計値】								200
1 自律力	88	12	12	12	12	20	20	
2 計画遂行力	102	20	20	10	10	21	21	
3 コミュニケーション能力	114	25	25	12	12	20	20	
4 チームワーク醸成力	38	8	8	4	4	7	7	
5 チーム指揮推進力（リーダーのみ）	8	0	0	0	0	4	4	